

論文内容の要旨

報告番号		氏名	堀中 昭良
Head-Up Sleep May Cure Patients With Intractable Benign Paroxysmal Positional Vertigo: A six-Month Randomized Trial			
難治性の良性発作性頭位めまい症はヘッドアップした姿勢で就寝することにより治り得る:6ヶ月間のランダム化比較試験			

論文内容の要旨

[目的]

本研究の目的は難治性良性発作性頭位めまい症(BPPV)患者の就寝時の頭位管理を評価することである。ヘッドアップによる就寝姿勢(Head-up sleep: HUS)により、浮遊耳石が半規管に迷入するのを防げるのではないかと仮説をたてた。

[対象と方法]

2014年5月から2018年4月までに当センターを受診し、前庭障害国際分類の2015年診療ガイドラインによりBPPV(疑念)と診断された611例のうち、3-6ヶ月以上症状が遷延もしくは再発を繰り返すBPPV難治例201例に就寝姿勢による治療効果の検討を勧め、合意した88例(男性28例:女性60例、平均年齢 53.6 ± 15.0 歳、発症からの平均病脳期間 68.4 ± 82.5 月)。コンピューターによるブロックランダム化により88例のうち44例に45度以上のヘッドアップによる就寝姿勢(Head-up sleep: HUS)を指導し、44例はヘッドダウン((Head-down sleep: HDS)とした。治療開始の前に自覚的姿勢垂直位(SVV)を含めて、いくつかの検査を行った。BPPV難治例88例の内訳は、外側半規管型クプラ結石症(Hcu)40例、外側半規管型管内結石症(Hca)13例、後半規管型(P)26例、疑い例(S)9例であった。治療3ヶ月後と6ヶ月後に眼振及びVASスコアで評価を行った。

[結果]

両群において患者背景に有意差は認めなかった。HUS群において治療3ヶ月後及び6ヶ月後ともにめまい症状のVASスコアはHDS群のそれと比べ有意に低かった。治療開始前に認めた頭位・頭位変換眼振についても治療6ヶ月後においてHUS群で有意に消失していた。さらには、HUS群の中で比較するとSVV正常群24例とSVV異常群20例の治療開始6ヶ月後におけるVASスコアはSVV正常群で有意に低下を認めた。

[考察]

耳石器の加齢性変化に伴う浮遊耳石を制御することは容易ではない。耳石が半規管に迷入するたびに物理的手法を用いて卵形嚢に戻すのを繰り返すことはよい方策とはいえない。ヘッドアップした姿勢で就寝することは難治性BPPV患者に対する初期治療として推奨されうると考える。